

1) 洗手強迫(血液)

強迫性障害 33歳 初診時主訴； 手を洗わないと気がすまない（洗手強迫）

幼い頃は平気で泥んこ遊びをしていた。大学までは成績優秀で某一流銀行に入社。入社後8年間は順調に仕事をこなしていたが、不動産関連会社に出向してから体調に狂いが生じ始め、徐々にうつ状態に陥って行った。

性格は几帳面で完璧主義

ある年の春先から気が滅入るようになる。8月頃から手を洗わないと気がすまない様になる。翌年正月帰省した際、C型肝炎の恩師から「血の付いた歯ブラシを使うと肝炎がうつるかもしれない」と言われてから、血が異常に怖くなり始める。その後ライバルの同僚の年賀状に彼の精液が付いているように感じられたり、書類のシミが血ではないかと怖くなり始め仕事に支障を来たしてきたので、当院初診となった。

初診では、「バカバカしいと頭で分かってるが、書類や勉強道具のシミが血でないかと気になって試験勉強ができなく困っている。妻が同僚にやさしくしてると妬ましい。妻や子供に手を洗えとうるさく言うので自分でも疲れてしまう。職場では何とかやれてるが、家では何度も妻に“手に血が

付いても大丈夫だよ」と確認するので、「いい加減にして！と無視されてしまう」と非常に困った様子で強迫症状を語った。診察終了後も「処方箋のシミは血でないですね！」と確認を執拗に求め、他患の診療にも支障を来たす程だった。

診断とその根拠； 何度も繰り返される常同的で不愉快な強迫思考と強迫行為に苦しんでいて、抵抗を試みるが成功していないことから、強迫行為を主とする強迫性障害（F 4 2. 1）と診断した。

治療経過； 初診後患者は再三「手を洗うのをやめた方がいいですね」と執拗に支持と確認を求めてきたが、「無理に洗うのをやめない方がいい。楽しみながら洗うように」と勧め、強迫や緊張からの離脱を指導した。また薬物治療として、まずクロキサゾラム 4 m g /日とロフラゼブ酸 2 m g /日を投与した。しかし血に対する恐怖は A I D S や O 1 5 7 や肝炎等の具体的疾患への恐怖に汎化し増悪して行った。家庭内に留まっていた確認強迫が職場でも出現し、同僚にも確認強迫が行われるようになると、担当上司やカウンセラーから休養するように言われ始め、急速にうつ状態に陥って行った。

クロルプロマジン（6 0 m g /日）とイミプラミン（5 0 m g /日）を投与すると、顕著に緊張感とうつ状態の改善が認められ、洗手強迫も減少し

て行った。しかし「薬だけでは確認行為がなくなるので、市販の本で読んだ認知行動療法をやって下さい」と繰り返し要求してきた。（強迫的）不安階層表を患者自身に作らせ一番低い（強迫的）不安項目を想起させて生じた不安を自律訓練法で消去して治療する系統的脱感作法を始めた。治療は極めて順調に進展し、12月には<トイレに落ちた印鑑>のイメージも不安なく想起できるまでになった。その後不動産業務でなくフィナンシャル・プランナー（以下FP）の方に進んでいいかと相談された。治療者は「強迫的な人は几帳面で正義感が非常に強いので監査業務に合っていることが多い。性格的にもFPは非常に合っている思う」と強く支持し、その後も繰り返し勇気づけた。彼は水を得た魚のように猛勉強を始め、X+4年12月に遂にFP一級の資格試験に合格した。その後はイミプラミン（10mg/日）だけで支障がなくなり、X+6年7月を最後に治療は終結となった。

考察

- a) 強迫観念の治療に対して、クロルプロマジンとイミプラミンの併用が有効であった。特にイミプラミンが強迫症状に対して顕著な効果を示した。なおパロキセチンは本人が希望せず試していない。
- b) 本症例は他者巻き込み型の強迫性障害であったが、強迫観念に対峙し

てその克服を迫るよりは、強迫症状を自己にとり意味のあるポジティブなものとして評価し、勇気づけて、自己価値観の改善に導く治療が効果があった。

c) 不安(強迫的)階層表を患者自身に作らせ、一番低い(強迫的)不安項目を想起させて生じた不安を自律訓練法で消去して治療する系統的脱感作法(行動療法)も非常に効果があった。

